

筑波におけるエスペラント

丸山 健人*

“Raporto de la Aerologia Observatorio de Tateno”
 —これは、高層気象台が1926年に第1号を発行し、1944年の第17号まで続いた観測報告の標題である。この第1号で、冬季、高度10 kmで70 m・s⁻¹をこえる風が記録されている。エスペラントで書かれたこの報告書は世界に配付されたが、戦時に発行された第17号は「軍資秘」扱いになり、次の第18号は日本語で発行されるはずであったが、1945年5月の東京空襲で焼失した。

初代台長大石和三郎は、「高層気象の如き研究は全世界が全く協同して之を為すに非ずんば容易に其の目的を達することが出来ないから、全世界の学者が容易に理解し得る言葉即ちエスペラントを使用するのが最も適当である」と考え、国際的報告書にエスペラントを用いただけでなく、気象台職員にエスペラントを教え、また「長峰学会」と名づけ、地元青年にも教授した。教え子の中からこの地方の教育文化活動において指導的役割を果たした者も出た。

戦時は、エスペランティストも権力の弾圧の対象にされ、戦後は人員整理等により、高層気象台におけるエスペラントを継承する者もいなくなった。その後、筑波研究学園都市が建設され、高層気象台は気象測器工場とともに新庁舎に移り、敷地内に気象研究所が転移してきた。海外の友人の来訪は年々増してきた。共通語は英語である。

この地にエスペラントの歴史があったことは忘れられたかのようであった。ところが、気象研究所にエスペランティストが現れた。臨時職員に採用された若い娘さんで、この夏北京市で開かれた世界エスペラント大会に参

加するなど国際的に活躍している。また、筑波研究学園都市のエスペランティストの会も発足しているという。筑波におけるエスペラントの歴史は、いま、全く新しい世代によって引きつがれている。

エスペラントは、ポーランドのザメンホフが創始した国際語で、1987年は創始100周年にあたる。スペイン語やポルトガル語に似ているので、ラテン・アメリカの人々は、初めての人でもかなり分かるという。また、ポーランドはじめ東ヨーロッパ諸国では学習がさかんで、よく通じるという。エスペラントは学ぶのにやさしいことばである。名詞は語尾oをもち、形容詞はaをもつなど、単語と文法は規則的につくられていて、例外がないからである。どの言語も、よく使う単語ほど不規則な変化をして初心者をお悩ませますが、エスペラントではそんなことはない。わりあい短期間に上達する学びがいがあることばといえよう。コンピュータ言語など、人工言語が広く使われている今日、エスペラントをもちこむのにも違和感はないと思う。気象界は大体英語が通じるので、かえって英語の通じにくいところとのつきあいがよくないようである。そんなときお互にエスペラントを知っていると好都合であり、大石台長の初志はむしろ今から生きてくるのかもしれない。

(追記) さて、エスペラントの娘さんは、このほど研究所の職員と結婚した。彼も目下エスペラントを学習中とのこと。祝意を表したい。

文献

- 高層気象台(編), 1950: 長峰回顧録集, 102 p.
 Wells, J.C., 1969: Esperanto Dictionary, Teach Yourself Books, 419 p.

* Taketo Maruyama, 気象研究所